

M-TEER 施行患者における術後の認知機能変化の特徴

済生会熊本病院では、医学の発展のため患者さんの診療情報等を使用し、本研究を実施しております。ご質問や利用停止等のお申し出は、「問い合わせ先」へご連絡下さい。

■ 研究の対象となる方

2018年6月1日～2025年9月30日に当院で僧帽弁閉鎖不全症に対し経皮的僧帽弁修復術（M-TEER）を受け、術後6カ月にMini-Mental State Examination（MMSE）での認知機能評価を行った方

■ 目的・方法

心不全の原因の一つである「僧帽弁閉鎖不全症」は、心臓の弁が正しく閉まらず血液が逆流する病気です。この治療法である経皮的僧帽弁接合不全修復術（以下M-TEER）は、カテーテルを用いて弁の逆流を抑える治療法です。

心臓の働きは、脳へ血液を送り届ける役割とも深く関わっており、心臓の機能が低下すると、脳への血流が十分に届きにくくなることがあり、その影響が認知機能にも及ぶ可能性が指摘されています。

心不全患者さんにとって、記憶力や判断力と言った認知機能の低下は、薬の管理や体調変化への気づきを難しくし、結果として再入院のリスクを高める要因となります。近年の研究では、心不全の治療によって心機能が改善することで、脳への血流も改善し、認知機能が回復した患者さんもいることが報告されています。しかし、心不全の治療が中長期的には認知機能にどのような影響を与えるかは、まだ十分に解明されていません。

そこで本研究では、M-TEER治療の前後で認知機能がどのように変化するかを調査いたします。あわせて、治療前にどのような特徴（心臓の動き、血液検査の結果、歩く速さなどの身体機能）を持つ方に変化が見られやすいのかを分析します。これらの分析を通じて、再入院を防ぐために必要な支援や、患者さんが退院後も安心してご自宅での生活を継続できるよう、リハビリテーションの立場から一人ひとりに適したサポートのあり方を見出すことを目指しています。

診療の中で得られた情報を使用します。この研究のために新たな検査や調査をお願いすることはありません。

■ 実施期間

2026年5月12日～2026年10月25日

■ 研究に使用する情報

年齢、性別、身長、体重、既往歴、服薬情報、介護保険の有無、NYHA分類、eGFR、BNP、LVEF、SAS、MMSE、フレイル評価、6分間歩行試験、握力 など

使用開始予定日：2026年5月12日

■ お問い合わせ

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、関連資

料を閲覧することが出来ます。また、本研究の成果は学会等での公表を予定しておりますが、個別にご説明することも可能です。いずれも下記へお申し出下さい。

試料や情報が本研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としますので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

連絡先	済生会熊本病院 リハビリテーション部 村田憲誠（研究責任者） 住所：熊本市南区近見 5 丁目 3 番 1 号 電話：096-351-8000(代表)
------------	---

以上